ロールレタリング研究，2013，第13号
Japanese Journal of Role Lettering, 2013 No.13

【原著論文】

ロールレタリング記述コード表の作成とその活用

A Study of the Creation and Utilization of Role Lettering Descriptor Code Charts

金子　周平

I　問題と目的

ロールレタリング（Role Lettering；以下，RL と略記）はエンプティチェア・テクニックを手紙（筆記）形式にしたもので，日本の矯正教育の中で生まれた技法である。その実践は矯正教育や学校教育の他，学生相談の事例[1, 2]や病院臨床の事例[3, 4]にも，臨床心理面接と併用する形で導入されている。RL を通した感情表現，新たな文脈での語りの促進，クライエント自らが問題に対処する力の援助，体験の書き言葉による明確化など，臨床心理面接と併用される目的は事例によって様々である。

RL に関しては実証的研究と事例研究を中心として，その効果の一般化が進められてきた。実証的研究では，自尊心の上昇[5]，エゴグラムの NP（養育的な親；Nurturing Parent）の上昇[6]や A（成人；Adult）の上昇傾向[7]などが指摘され，多くの臨床実践の報告とも一致している。また事例研究の積み重ねから，春口（1987）が「文章による感情の明確化，カタルシス作用，対決と受容，自己と他者の双方からの視点の獲得，イメージ脱感作，自己の非論理的・自己敗北的・不合理的な志向に気づく」の7つの臨床仮説をまとめ，自立性・積極性の確立もその背景として挙げている[8]。概念上重複する可能性もあるが，現実吟味能力の向上や感情移入的理解・共感性の向上[9]も指摘されている。

これらの研究は RL の効果に注目したものである。一方，膨大な量になる RL の記述データは分析されないことが多かった。事例研究においても記述の詳細を論じる際に，RL の記述の抜粋や省略が行われることが多い。記述自体に関する詳細かつ包括的な質的研究は非常に少なかったのである。以前から法務教官の一部では記述を意味毎に区分し，見出しをつける理解方法がなされてきたと言われている。例えば竹下（2007）も，記述の細かな単位に見出しをつけることで特徴的な繰り返しを指摘している[10]。記述を省略せずに全体の流れを理解する試みである。小澤ら（2006）による相談者と相談相手の手紙のカテゴリー[11]，金子（2008）による受容的な人物との手紙のカテゴリー[12]は，特定の手紙の相手に関する RL 記述の特徴を導いたものの，妥当性や信頼性の面では十分な検討がなされておらず，多様な RL 実践に適応できる汎用性を備えてはいない。

RL の記述が分析や研究の対象となりにくかったのには，他にも幾つかの理由がある。書いたものを読まない保証によって“告白機能と守秘機能の統合”[13]を可能にする場合などである。読まない保証は特に教育場面等において効果的な場合があるが，和田（2008）の言うように，心理療法では RL を読むことでよりクライエントを深く理解できる可能性もある[14]。この点では RL が臨床心理面接との併用で使用されるに従い，記述データを対象とした研究はさらに増える可能性がある。

また RL は筆記を用いる技法であるため，セラピストが心的プロセスを即座に理解・共有することが困難である。集団実施の場合はさらに個々人の心的プロセスを捉えにくくなる。そのため RL 後に記述自体を振り返るよりも，書いたことによる感想や体験した感情などについて話し合い，共有した方が実践的

鳥取大学大学院医学系研究科

である。そのような理由によって記述データが研究対象にされにくかったとも考えられる。

記述の分析（コード化）に基づく研究は，記述全体にみられるプロセスやパターンを発見できること，記述の変数化によって質的研究と量的研究の両面に貢献できることなどの利点が挙げられる。本研究では多くのRL実践に汎用性のあるRL記述コード表を作成し，妥当性と信頼性の検討を行うこと，さらにコード表を活用した研究の可能性を示すことを目的とする。

Ⅱ　方法

1. 対象

RL研究第1〜6巻より，極端に省略してあるものを除いたRL記述を19論文から抽出後，もう一人の自分とのRLや，物語の登場人物間のRLなど，往信と返信の区別が困難なものを除外し12論文を対象とした。また春口（1987，1995）のRLに関する書籍2冊も対象とした。対象となった12論文は，竹下（2001）[15]，下村（2001，2003）[16, 17]，阿部（2002）[18]，森上ら（2002）[6]，細井ら（2002）[7]，岡本（2002，2005，2006）[19, 20, 1]，目黒（2004）[21]，松岡（2006）[22]，三星（2006）[23]である。

2. 手続き

KJ法[24]によって分類される記述の単位を，往信・返信別にそれぞれ抜き出した。記述の単位（カード）の抽出方法の決定は，コード化によって記述がどの程度適切に理解されうるかという点で重要である。Flick（1995）は質的データについて“分析レベルの選択は，研究設問や資料，あるいは個々の研究者の思考スタイルや研究の段階によって異なる”と述べている[25]。本研究では文章の形式面に左右されない「記述動機単位」を区分の単位とした。質的データのコード化においては，文法的な区切り（句読点），行，段落の他，テーマや命題，言及対象などを単位とすることがある[26, 27]。本研究で採用した記述動機とは，書き手が意図したテーマによって区分する方法のうち，RLの相手との関係性の中で書き手の動機となっている単位を読み取って区分するというものである。この手続きは仮説的に決まっていたものではなく，筆者が記述データを様々な単位でコード化していくプロセスの中で採用された視点である。

Ⅲ　結果

1. 妥当性の検討（第一段階）

抽出された往信の270カード，返信の177カードについて，臨床心理学を専門とする大学院生3名によるKJ法を行い，往信19コード，返信20コードからなる暫定版のコード表を作成した。RLを専門とする研究者5名に依頼し，(1) RLの記述をコード化するものとしての必要かつ十分な内容があるか，(2) コードがローデータ（270カード，177カード）を反映しているか，(3) RL記述コード表としての使用しやすさの面から，RL記述コード表の妥当性の検討を行った後，カテゴリー数の変更や内容の追加を行った（往信18コード，返信19コード）。

以下に5名の研究者による主な検討点を挙げる（表1）。これらの他にも，プロセスの視点を導くこと，復讐心や嫉妬心，自己嫌悪などのコードの必要性も提案がなされたが，データとの対話の中で，抽出には至らなかった。

表1　妥当性に関する主な検討点

往信についての指摘
・「好意や甘え」と「依存関係」を区別し，前者は肯定的な感情表現，後者はアンビヴァレントな感情表現を想定する必要がある
・「不満や嫌悪」よりも「不満や怒り」の方が実際のデータに合っている
・「過去の振り返り」のコードが必要である
・コードはローデータの内容を反映している
・コード数が多く、分析しにくい
返信についての指摘
・コードはローデータの内容を反映している
・コード数が多く、分析しにくい
その他
・省略されていない事例を分析した方が妥当性が確保できる

表2　ロールレタリング記述コード表（往信：私から相手へ）

コード		記述
1	不満や怒り	相手への不満・不信、嫌悪・怒り 相手から受けた被害や傷つけられたことの訴え 相手への厳しい忠告・要求
2	依存関係	相手なしには無力な自分の表現 相手の考えや価値観の全面的受け入れ 自己犠牲的な貢献
3	苦悩や苦境	きつさ、辛さ、悲しさなどの苦悩の表現 行き詰まった状況や苦境の表現
4	葛藤、複雑な心境	葛藤的で、アンビバレントな感情表現 複雑な心境や交錯した状況の表現
5	相手への期待	相手に求めたい姿の要求、相手への願い 相手からの尊重や賞賛、気持ちの理解の期待
6	相手の気持ちの確認	相手の考えや気持ちについての確認や質問
7	内省や内言、気づき	気持ちやものごとの捉え直し、分析、解釈 不確かな推測やつぶやき、気づき
8	好意や甘え	相手への好意・尊敬・尊重、長所の言及 甘えや信頼の表現、不安や強がりの告白
9	心配や心情理解	相手への心配・気遣い、心情や背景の理解
10	謝罪や反省	迷惑や苦労をかけたことへの謝罪、反省、後悔
11	感謝	相手からしてもらったことへの感謝 お世話になっていることの伝達
12	自立や成長の報告、決意	自分の意志による決意や成長への願望 自立や成長、自分らしさの報告 頑張りや努力の報告、よい知らせ
13	関係継続の期待や展望	今後の関係継続の示唆や展望 相手からの応援、見守りなどの期待
A	過去の振り返り	共有されている思い出や過去の関係の振り返り
B	事実説明	ものごとや出来事についての説明 自分自身についてや第三者についての説明

2. コード表の修正と再構成

筆者を含むRLの実践家，研究者3名から，省略されていないRLの記述を収集した。省略や修正のない19のRLデータについて，筆者を含む3名のRLの専門家と大学院生4名によるコード化を行い，コードの分割，統合，項目の追加，記述の修正を行い，記述コード表を再構成した（往信15コード；表2，返信14コード；表3）。アラビア数字（往信）やローマ数字（返信）のコードは，RLの記述時（現在）に感じられている情緒の表現などが明確であり，アルファベットのコードはそれが明確でないことが特徴である（詳細は「4. コード化の手順」に示す）。

3. 妥当性と信頼性の検討（第二段階）

1）妥当性の5段階評価

筆者を含む3名のRLの専門家によって，以下の3点から記述コード表の妥当性が検討された。(1) 出現頻度：これまでのRL実践経験から，コードに該当する記述が出現する頻度がどの程度予想されるかの主観的判断，(2) コード化のしやすさ：各コード間が独

表3　ロールレタリング記述コード表（返信：相手から私へ）

コード		記述
i	不満や非難	「私」の態度や言動への不満や非難 「私」の短所や気づいていない欠点の指摘 「私」から迷惑を受けていることの伝達
ii	自立への抵抗や執着	「私」の自立に対する否定的な表現 「私」が離れることへのしがみつきや不安の表現
iii	正当性の訴えや弁明	自分の言動についての背景にある気持ちの説明 自分には悪気はないことなど正当性の訴え 「私」のための貢献や努力の訴え
iv	理解困難や対応困難	「私」の言動や考えを理解できないという表明 「私」の期待に応えることの困難さの表明
v	異なる視点	「私」とは異なる考え方や視点の提示 人の様々な思いや捉え方の言及 「私」の気持ちや考えに対する驚きの表現
vi	「私」への期待や願い	「私」の変化や成長への期待、応援、願い、祈り 気持ちや思いを理解して欲しいという願い
vii	心配	「私」の生活や体調などへの心配 「私」が元気で過ごしているかどうかの確認
viii	成長や努力への賞賛	「私」の成長や努力に対する喜びや賞賛
ix	感謝や好意	助けられていることなどへの感謝 「私」の良いところを伝える等の好意
x	謝罪や反省	「私」を傷つけ、嫌な思いをさせたことの謝罪 自分の言動や性格のふり返りや反省
xi	そのままの理解や尊重	「私」の気持ちや考え、苦労へのそのままの理解 「私」への尊重や信頼、苦労への労い 「私」の言葉の繰り返し
xii	関係継続の保証や展望	また会うことや連絡を取ることの保証 これからの関係についての展望
a	過去の振り返り	共有されている過去の出来事や関係の振り返り
b	事実説明	出来事や第三者についての説明や報告 自分の考えや気持ちの説明

立（相互に背反）しているなどの分かりやすさ，理解しやすさなどによる主観的判断，(3) 臨床的重要度：RL を行う上で注意する記述や，何らかの指標とする記述など臨床心理学的な重要度の3点である。妥当性の5段階評価の平均値が極端に低いもの（全体の平均値-2SD）はなくコード化に強く支障を来すものはないと判断したが，(2) と (3) の両基準において比較的妥当性が低い（全体の平均値-1SD）コードとして［往信A，往信B，返信ii，返信a，返信b］の5コードが挙がった（以下コードは［　］内に表記）。

臨床的重要度が最も高いと評価された項目は，往信の［4］（平均 5.0）である。次いで高く評価された項目は返信の［i］（平均 4.71），往信の［3］と返信の［iii］（平均 4.57），往信の［1］［5］［7］［9］［11］［12］，返信の［vi］［xi］（平均 4.43）である。

2) 信頼性の検討：コード化の一致率

信頼性の検討として，RL の実践家から収集された省略・修正のない 19 の手紙を RL の専門家3名を含む6，7名でコード化し，

その一致率を求めた。1 人でも記述を区切る箇所があれば区別し，それらを最小単位にした後に各コードを比較した。半数以上が同一のコードを選択した確率は 83.3%であった。6，7 名のコード化によって，おおくの記述は半数以上を基準に採用できたが，判断が難しい記述も少なくなかった。実践的には 2，3 名によるコード化が望ましいと思われるため，任意の 2 名による一致率を求めると 50.3%，任意の 3 名の内 2 名が一致する確率を求めると 82.2%となった。決して高い確率ではないが，コード化に一定の信頼性を持たせるためには 3 名以上によるコード化で，一致したコードの採用や協議・再検討を行うことが必要である。

4. コード化の手順

記述コード表の作成段階で明確化されたコード化の手順を示す。コード化を行う者は，記述動機や意図を単位として区分を行うためにも往信と返信の各コード表の内容を十分に把握する必要がある。記述の区分は，先述のように句読点や文節，段落などとは無関係に記述動機や意図を優先して決定する。

区分された記述にはコードを 1 つだけ付与する。[往信 1～13, 返信 i ～xii] は「現在 (RL 記述時に) 感じられている手紙の相手への情緒の表現もしくは，記述の意図や動機，思考過程が明確であるもの」と定義される。そのため不満が記述されていても手紙の相手以外に向けられている場合（「あの人が嫌いです」など）は [往信 1：不満や怒り] や [返信 i ：不満や非難] は付与されない。「昔はあなたを憎んでいました」などの過去の情緒表現も同様である。[往信 A，返信 a] は「現在の情緒の表現，記述の意図や動機，思考過程が伴わない場合もある記述で，手紙の相手と共有している過去の話として心的距離をとって記述されているもの」，[往信 B，返信 b] は「現在の情緒の表現，記述の意図や動機，思考過程が伴わない場合もある記述で，過去・現在・未来，一人称・二人称・三人称についてのあらゆる説明を含むが，他のコードには該当しないもの」と定義される。つまり現在の心の動きが読み取れない場合や，読み取れても他のコードに合致しない場合は，「A，B，a，b」のコード化を考慮する手順となる。

明確な推測以外の解釈は行わないことが原則である。決まりきった挨拶や修辞も，字義通りの意図が込められている可能性があるため，例えば「元気で過ごしていますか」は，[往信 9：心配や心情理解] や [返信vii：心配] となり，「今後もよろしくお願いします」は [往信 13：関係継続の期待や展望] や [返信xii：関係継続の保証や展望] となる。しかし，例外的に以下の 2 点のような場合は解釈によるコード化を行う。a）前後の文章から推測できる場合。例えば「気になります」という言葉は，[往信 8：好意] や [返信ix：感謝や好意] にも [往信 1：不満や怒り] や [返信 i ：不満や非難] にもなりうる。b）自分や相手の立場で書かれた以前の手紙の内容と呼応している場合。例えば返信で書かれた「将来のことで悩むのは大切なことだよ」という文章は，往信で積極的に悩みを書いている場合には [返信xi：そのままの理解や尊重] となり，往信で悩みを回避している場合には [返信 v ：異なる視点] となる。

Ⅳ　考察

本研究で作成した RL 記述コード表は，使用しやすさの面から最小限のコード数で構成され，省略・修正のない RL にも諸側面から妥当性が確保されることを示したため，研究利用においては実用段階と判断できよう。この実用段階とは，特定の記述の有無や量（文字数など）の数量化を通して，記述データに基づいた実証的研究に活用できることなどを示している。

このコード表は 1）膨大な記述を，書き手の動機や意図のレベルで要約できるツールであり，2）そのコード化を 3 名以上で行うことで信頼性（一定の一致率）を確保できることが示された。ただしコード化をする 3 名以上のものは継続して分析を行う方が望ましい

と考えられる。一連の手紙は，前に書かれた手紙との呼応関係で意味を捉える必要があるためである。

臨床心理面接などに併用しているRLについて，面接継続時に記述コード表を適用することは慎重である必要がある。記述されている曖昧な表現を明確化して理解してしまうこと，短い文章の背景にある豊かなイメージ[28]にセラピストが注目しにくくなることなどの弊害が起こる可能性があるためである。例えクライエントの記述の分析にコード表を用いたとしても，そこから得られた理解を安易にクライエントにフィードバックすることも避けるべきであろう。それを踏まえた上で，事例の理解に活用する視点を挙げたい。金子（2009）はある臨床心理面接の中で記述されたRLをコード表によって分析し，不満の連続のように見える記述が，異なる複数コードの繰り返し構造を含んでいることを見出している。この事例では，「不満や怒り［1］」とほぼ交互に，「内省や内言，気づき［7］」，「苦境や苦悩［3］」，「相手の気持ちの確認［6］」が繰り返し表現されていた（冒頭のコード：1，7，1，3，1，3，1，3，1，6，1，6，1，7…）。図として体験されていると考えられる［1］の背景で，地として揺れ動く気持ちが描写されているのである。またこの事例ではRLの展開につれてコードの種類（記述の幅）が増加していることも見いだされている[4]。また看護学生による，患者と看護師のRLにおいては，コードの種類が中程度であること共感性の高さが関係していること，特定のコードと共感性の安定が関係している可能性があること[29]も示されている。十分な配慮と準備の元ならば，例えば記述コード表によって得られた記述のパターン，記述の種類の多さ，記述の推移の理解をセラピストの応答の可能性を広げるために活用することもできよう。

記述コード表の限界はこれまでも述べてきたが，「現在の自分と10年後の自分」「強気な自分と弱気な自分」などのダブルモノローグのRLには適用できないことも挙げられる。これはコード表の作成時に用いたKJ法のデータが，自己と他者（もしくは物や概念）の間で交わされたRLしか対象にしていなかったためである。方法で述べたように，往信と返信の区別が困難なものを除外しているのである。例えば現在の自分の立場で記述した直後に10年後の自分の立場から現在の自分を客体化するなど，1回の手紙の中でも主客が容易に交代しうるため，より全体的な往信と返信を区別しない分析方法が必要となるであろう。

<付記>本稿の作成にあたり，ご協力やご助言をいただきました立命館大学の岡本茂樹先生，RLの研究者・実践家である目黒信子先生，原野義一先生，松本英明先生，和田英隆先生に心より感謝致します。また論文作成のご指導をいただきました跡見学園女子大学の野島一彦先生に御礼申し上げます。
※本研究は平成21，22年度科学研究費補助金（課題番号21730551）の助成を受けた。

文献

1) 岡本茂樹（2006）：ロールレタリングを用いた摂食障害の女子学生に対する卒業間際の支援　ロールレタリング研究，6，13-25.
2) 岡本茂樹（2008）：父親に対して否定的感情をもつ女子学生へのロールレタリングによる支援　心理臨床学研究 25（6），647-658.
3) 原　節子・中村延江・桂　戴作（1995）：ロール・レタリングが神経性食思不振症の治療に果たす役割　杉田峰康（監修）・春口徳雄（編著）ロール・レタリングの理論と実際　チーム医療　pp222-232.
4) 金子周平（2009）：臨床心理面接へのロールレタリングの導入における諸問題とプロセス理解　ロールレタリング研究，9，1-12
5) 岡本泰弘（2006）：生徒のメンタルヘルス

を促進するロールレタリング―中学校学級経営への導入を通して―　ロールレタリング研究，6，43-52.
6) 森上美佐子・松岡洋一・坂手未来（2002）：教育におけるロールレタリングの効果に関する研究―中学生を対象として―　ロールレタリング研究，2，23-34.
7) 細井由美・犬塚文雄（2002）中学校における「ロールレタリング」を用いた心理教育に関する一考察　ロールレタリング研究，2，35-46.
8) 春口徳雄（1987）：ロール・レタリング（役割交換書簡法）入門―人間関係のこじれを洞察する　創元社
9) 才田幸夫・春口徳雄（2000）：ロール・レタリング（役割交換書簡法）による生と死の教育―中学校における実践報告―　犯罪と非行，125，231-258.
10) 竹下三隆（2007）：いじめや人間関係のトラブルに効果的なロールレタリング　日本ロールレタリング学会第8回大会研究発表抄録集，6-9.
11) 小澤　真・鈴木由佳（2006）：大学生の進路選択の悩みに対するロール・レタリングの効果　聖徳大学心理教育相談所紀要，4，37-43.
12) 金子周平（2008）：受容的な人物とのロールレタリングが自己愛に与える多様な影響―内容評定と特徴的な事例から―　ロールレタリング研究，8，31-42.
13) 原野義一（2002）：ロールレタリングにおける告白機能と守秘機能の統合　ロールレタリング研究，1，15-26.
14) 和田英隆（2008）：ロールレタリング（役割交換書簡法）の原点について　ロールレタリング研究，8，1-11.
15) 竹下三隆（2001）：少年院におけるロールレタリングの実践的技法の考察　ロールレタリング研究，1，39-48.
16) 下村明子（2001）：看護教育におけるロールレタリングを用いた実践―自尊感情の低い学生に対する患者理解のアプローチ―　ロールレタリング研究，1，49-57.
17) 下村明子（2003）：看護教育におけるロールレタリング―ケアリングに通じる患者理解のアプローチ―　ロールレタリング研究，3，35-47.
18) 阿部　昇（2002）：ナラティブ・モデルからみたロールレタリング―グリーフ・ワークのための自助グループでの試み―　ロールレタリング研究，2，9-22.
19) 岡本茂樹（2002）：ロールレタリングを導入した書簡によるカウンセリングの試み―虐待を繰り返す母親の心の傷を癒すために―　ロールレタリング研究，2，47-60.
20) 岡本茂樹（2005）：アイデンティティの危機にある男子学生のロールレタリングによる自己意識の変化　ロールレタリング研究，5，21-31.
21) 目黒信子（2004）：学校臨床におけるロールレタリング導入に関する研究 2―攻撃性を和らげる書簡相手の決定とその方法―　ロールレタリング研究，4，17-27.
22) 松岡洋一（2006）：子どもの心を育むロールレタリング　ロールレタリング研究，6，1-12.
23) 三星喬史（2006）：教師の自己肯定感を高めるロールレタリングの一試論　ロールレタリング研究，6，63-72.
24) 川喜田二郎（1967）：発想法　創造性開発のために　中公新書
25) Flick, U. (1995): *Qualitative forschung.* Rowohlt Taschenbuch Verlag GmbH, Reinbek bei Hamburg. 小田博志・山本則子・春日　常・宮地尚子（訳）（2002）：質的研究入門―＜人間科学＞のための方法論　春秋社
26) Ryan, G. W. & Bernard, H. R.(2000): Data management and analysis methods. In *Handbook of qualitative research*, 2nd ed., Denzin, N. & Lincoln, Y. Thousand Oaks. CA: Sage 平山満義（監訳）・大谷　尚・伊藤　勇（編訳）

(2006)：データ処理と分析方法，質的研究ハンドブック3巻　北大路書房
27) Krippendorff, K. (1980): *Content Analysis: An Introduction to Its Methodology*. Sage Publication, Inc.三上俊治・椎野信雄・橋元良明（訳）(1989)：メッセージ分析の技法　勁草書房
28) 春口徳雄 (1995)：ロールレタリング（役割交換書簡法）の理論と実際　チーム医療
29) 金子周平 (2012)：看護学生の共感性の変化を狙いとした教育的ロールレタリング―記述コード表による分析―　日本ロールレタリング学会第13回大会研究発表抄録集，50-53.